

P NEW JAPAN
HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2024/2025シーズン

3

March, 2025



JOE HISAISHI



GEN OHTSUKA

2024/2025 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 3月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #29 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #661 相場ひろ	7
楽員ストーリーズ ④⑥ 腰野真那 (パーカッション)	15
NJP from Inside	16
佐渡 裕 2025/2026シーズンを語る 柴田克彦	19
2025/2026シーズン 定期演奏会プログラム	24
お客様からの声	29
室内楽シリーズ	33
「パトロネージュ・システム」のご案内	38

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。



3.14 [金] 15 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第29回
2025年3月14日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
3月15日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

●ブラームス (1833-97)

ピアノ協奏曲第1番 二短調 op.15 *

約45分

Johannes Brahms: Piano Concerto No.1 in D minor, op.15 *

- I. Maestoso
- II. Adagio
- III. Rondo: Allegro non troppo

—— 休憩20分 ——

●ベートーヴェン (1770-1827)

交響曲第5番 八短調 op.67 「運命」

約30分

Ludwig van Beethoven: Symphony No.5 in C minor, op.67

- I. Allegro con brio
- II. Andante con moto
- III. Allegro
- IV. Allegro

※当初発表の曲順から変更になっております。

[指揮] 太田 弦
Gen Ohta, Conductor

[ピアノ] アレクサンダー・ガジェヴ *
Alexander Gadjiev, Piano *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙
Munsu Choi, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール
- 特別協賛：オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

<コンサートの感想をお寄せください>

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。



@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願いいたします。

<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



©ai ueda

太田 弦 [指揮] Gen Ohta, Conductor

1994年、北海道札幌市生まれ。幼少よりチェロとピアノを学ぶ。東京藝術大学音楽学部指揮科を首席で卒業し、安宅賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。同大学院修士課程修了。2015年、第17回東京国際音楽コンクール(指揮)で2位及び聴衆賞受賞。2022年度、第30回渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。指揮を尾高忠明、高関健に、作曲を二橋潤一に師事。山田和樹、パーヴォ・ヤルヴィらのレッスンを受講。これまでに読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団などを指揮。2019年4月から2022年3月まで大阪交響楽団正指揮者を務め、2023年4月より仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者、2024年4月より九州交響楽団首席指揮者に就任。2021年、オクタヴィア・レコードよりシューベルト「ザ・グレート」(新日本フィル公演ライブ)をリリースし話題となる。2024年7月には、九州交響楽団首席指揮者就任記念コンサートのライブ録音CDが同レーベルより発売され、好評を博している。



©Andrej Grlc

アレクサンダー・ガジェヴ [ピアノ] Alexander Gadjevi, Piano

ゴリツィア(イタリア)生まれ。9歳でオーケストラと初共演、10歳で初リサイタルを開いた。17歳の時、イタリアの教育機関で最高評価を得た若手だけが競うコンクール「プレミオ・ヴェネツィア」(2013年)で優勝。その後2015年からは同年の浜松や、2018年モンテカルロ、2021年のシドニーなど、現在まで参加した国際コンクールでほぼすべて優勝している。2021年のショパン国際コンクールの第2位およびソナタ賞受賞は非常に注目された。

これまでレイージ指揮/RAI国立響、ゲルギエフ指揮/マリインスキー劇場管をはじめ、指揮者ではズービン・メータ、テミルカーノフ、ヴィトらと共演している。2024年より毎年ロンドンのウィグモアホールでリサイタルを予定している。

またヴェルビエ音楽祭やオールドバラ音楽祭など音楽祭への参加も多い。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

「イタリア人にはナポリがあり、フランス人には革命があり、イギリス人には船旅があるように、ドイツ人にはベートーヴェンの交響曲があるのです」と、1839年7月2日の「新音楽時報」に掲載された「管弦楽のための新しい交響曲」という記事で語ったのはロベルト・シューマン(1810~56)だった。ドイツ人としてルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の交響曲にどれほど誇りをもっていたのかが伝わってくるだろう。

それから14年後、20歳のヨハネス・ブラームス(1833~97)が披露したピアノ・ソナタを「ヴェールに包まれた交響曲」とシューマンは評すことで、ブラームスのソナタがいずれ交響曲へと発展するはずと“予言”した。当然、シューマンのいう交響曲とは「ベートーヴェンの交響曲」が前提になっているわけで、こうして暗黙のうちにブラームスはベートーヴェンの後継者になることを求められるようになってしまったのだった。

■ブラームス: ピアノ協奏曲第1番 二短調 op. 15

夢みた交響曲から
協奏曲へ

まさに交響曲の創作を試みながらも上手いかず、協奏曲に仕立て直されたのが本作である。シューマンは「ヴェールに包まれた交響曲」と評してから4ヶ月後、1854年2月27日に精神を病んでライン川へ身投げ。一命こそ取り留めたが療養所に収容されてしまう。こうした一連の事件のさなか、ブラームスが書いていたのが2台ピアノのためのソナタ 二短調だった。このソナタをもとにブラームスは交響曲を作曲しようと1854年の夏に試みたようだが、シューマンの“予言”がプレッシャーとなったのか頓挫。1855年2月、完成しなかった交響曲をピアノ協奏曲として演奏する夢をみたことで、交響曲から協奏曲へと計画を変更した。

時代を先取りした
独創性

初演や再演で挙がった「独奏ピアノが退屈」「協奏曲ではなく交響曲のよう」という批判は、創作経緯を鑑みれば当然だったといえる。むしろ今日ではどれほど独奏が華麗でも、管弦楽が単なる伴奏になってしまっている協奏曲は高く評価されない傾向にあり、独奏と管弦楽が対等に拮抗する本作はこの時代を代表するピアノ協奏曲とみなされている。加えて第1楽章の独創的な構成は、ベートーヴェンやシューマンの協奏曲を真似ておらず——模倣していたら、きっと冒頭からピアノが登場していたはず!——、協奏曲として作曲しはじめなかったからこそ、独自性が発揮されたのだろう。具体例を少し挙げれば、“偽の第2主題”を登場させることで新たなドラマを生み出しているのが実にユニークだ。

第1楽章 協奏ソナタ形式。管弦楽による[提示部1]は、決然とした第1主題ではじまる。少し落ち着くと、この断片的な主題はチェロの伴奏フレーズに変容し、無意識下で繰り返される。その上で穏やかに第1ヴァイオリンが奏する旋律は徐々に変化し、トレモロになるところから“偽の第2主題”となる。再び第1主題が現れて、低弦と対位法的な掛け合いになると[提示部2]になって新しい素材がいくつか追加されていく。管弦楽から引き継いでピアノが最初に弾く旋律のリズムもそのひとつだ。また第1主題が展開された後は、“偽の第2主題”に繋がっていくが、徐々に雰囲気明るくなった先で遂に、ピアノだけで奏されはじめる本物の第2主題が初登場する。

明るい空気が壊されると浮き沈みの激しい[展開部]に突入。穏やかだった“偽の第2主題”が姿を変えてかき乱していく。ピアノが改めて第1主題を提示すると形式上は[再現部]になるが、印象としては展開部が続いているようにも聴こえる。そして“偽の第2主題”が主調(二短調または二長調)で再現されず、偽物であることが遂に発覚。本物の第2主題が登場すると再び幸せな雰囲気を醸し出すが、姿を変えた“偽の第2主題”がまたもや現れると[結尾(=第2の展開部)]に突入して、激烈な世界へ舞い戻ってしまう。

第2楽章 三部形式。宗教音楽のように澄み切った[主部]と、感情が大きく揺らぐ[中間部]が劇的なコントラストを生み出す。作曲者自身によれば、この楽章はロベルト・シューマンの妻であるクララの肖像だという。

第3楽章 変則的なロンド・ソナタ形式([提示部(A-B-A-C)][展開部][再現部(A-B)][結尾])。[提示部]は勇んで闘うような第1主題(A)が繰り返されるさなかに、明るく前向きな第2主題(B)が挟み込まれる。弦楽器が主体となる慈愛に満ちた第3主題(C)は徐々に変奏されていき、フーガ風になってからは短い[展開部]に突入。[再現部]になってからも第1主題は展開され続け、明るかった第2主題は短調に。緊張感がピークに達すると(ブラームスが全て楽譜に書き記した)カデンツァとなるが少しずつ空気が和らぎ、管弦楽が戻ってきた[結尾(=第2の展開部)]で大団円を迎える。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ ベートーヴェン：交響曲第5番 ハ短調 op. 67「運命」

全体にわたる主題労作 ▶ シューマンがドイツ人の誇りと考えた「ベートーヴェンの交響曲」は、皆さまご存知のように第9番まで遺されている。そのなかで丁度真ん中に位置するこの第5番(1807~08)は、限られた素材を変奏して全体に行き渡らせる“主題労作”と、後半にクライマックスを築く“フィナーレ志向”を、ひとつの楽章内だけでなく作品全体で追求。しかも新しい形式を作るといよりも、既存の形式に工夫を加えることで、古典的な形式美を保つことにも成功している。先人であるハイデンやモーツァルト以上に、後世の作曲家の規範となる作品となった。

構成と細部の特徴 ▶ **第1楽章** ソナタ形式。冒頭の第1主題はあまりに有名だが、執拗に繰り返される「タ・タ・タ・ター」というリズムだけでなく、上下のジグザグしたメロディの動き「ソ・ソ・ソ・ミ♭ ♯ファ・ファ・ファ・レ」も重要。これらリズムとメロディの要素を主題労作して、第1楽章全体が生成されていく。例えば、第1主題の音程関係を広げるとホルンのシグナル「シ♭・シ♭・シ♭・ミ♭ ♯ファ・シ♭」になり、それを変奏すると直後に登場する優しげな第2主題「シ♭・ミ♭・レ・ミ♭・ファ・ド・ド・シ♭」に姿を変える。

第2楽章 変奏形式。主題は穏やかにはじまり徐々に勇ましくなっていくが、その一部にひっそりと「タ・タ・タ・ター」のリズムが織り込まれている。この主題は何度も変奏されていくのだが、第2変奏から徐々に自由度を増していき、最後の第4変奏ではテンポが上がる。

第3楽章 三部形式(スケルツォトリオスケルツォ)。強弱の対比が鮮やかな短調のスケルツォで、勇ましいホルンがはっきりと「タ・タ・タ・ター」のリズムを刻む。中間のトリオでは長調になり、対位法的に盛り上がりつつ新しい対比を生み出す。再びスケルツォに戻ってからは威圧感を失い、徐々に輪郭が不明瞭になると切れ目なく次の楽章へ突入。

第4楽章 ソナタ形式。フィナーレに相応しい歓喜に満ちた第1主題ではじまり、少し落ち着いた第2主題には「タ・タ・タ・ター」のリズムが織り込まれている。このリズムは展開部中盤のクライマックスや、展開部後半におけるスケルツォの回想で、より明確に繰り返される。再現部のあとに続く結尾(=第2の展開部)で徐々にスピードを上げ、真のクライマックスを築き上げる。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2024-2025 Season

#661

3.20 [木・祝]
トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第661回定期演奏会
2025年3月20日(木・祝) 14時00分
すみだトリフォニーホール

3.22 [土]
サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第661回定期演奏会
2025年3月22日(土) 14時00分
サントリーホール

●メシアン (1908-92)

トゥーランガリラ交響曲

約85分

Olivier Messiaen: Turangalila-Symphonie

- I. 序奏 Introduction
- II. 愛の歌 1 Chant d'amour 1
- III. トゥーランガリラ 1 Turangalila 1
- IV. 愛の歌 2 Chant d'amour 2
- V. 星たちの血の喜び Joie du sang des étoiles
- VI. 愛の眠りの園 Jardin du sommeil d'amour
- VII. トゥーランガリラ 2 Turangalila 2
- VIII. 愛の展開 Développement d'amour
- IX. トゥーランガリラ 3 Turangalila 3
- X. フィナーレ Final

※本公演は休憩がありません。

[指揮] 久石 譲

Joe Hisaishi, Conductor

[ピアノ] 角野隼斗

Hayato Sumino, Piano

[オンド・マルトノ] 原田 節

Takashi Harada, Ondes Martenot

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙、西江辰郎

Munsu Choi and Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール [3/20公演]
- 特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくなる。
そのころざしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

豊島美術館

鹿島特設サイト



100年をつくる会社
in 鹿島

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団





©Nick Rutter

久石 譲 [指揮] Joe Hisaishi, Conductor

現代音楽の作曲家として活動を開始し、音楽大学卒業後からミニマルミュージックに興味を持つ。1981年に「MKWAJU」を発表、翌年の1stアルバム「INFORMATION」のリリースがソロアーティストとしてのキャリアの始まりとなった。2023年にドイツ・グラモフォンからリリースされた「A Symphonic Celebration」では米国ビルボード2部門で1位を獲得。

2004年「新日本フィル・ワールド・ドリーム・オーケストラ (W. D. O.)」音楽監督に就任。17年「Joe Hisaishi Symphonic Concert: Music from the Studio Ghibli Films of Hayao Miyazaki」世界ツアーを開始、各地で大成功を収める。14年より最先端の“現代の音楽”を紹介する「MUSIC FUTURE」を主宰、19年には「FUTURE ORCHESTRA CLASSICS」を開始し、同年リリースの「久石 譲 ベートーヴェン：交響曲全集」は第57回レコード・アカデミー賞特別部門特別賞を受賞。近年はクラシック音楽の指揮者として活動するほか「Metaphysica (交響曲第3番)」「Viola Saga for Orchestra」などの作品発表にも意欲的。2024年11月にはロサンゼルス・フィルをはじめとする4団体の共同委嘱によるハープ・コンチェルトを世界初演した。

これまで、フィリップ・グラス、デヴィッド・ラング、ミッシェル・マイスキーなどのアーティストや、ウィーン響、ヘルシンキ・フィル、ロンドン響、メルボルン響、シカゴ響、トロント響、サンフランシスコ響などのオーケストラと共演。

新日本フィルハーモニー交響楽団 Music Partner、日本センチュリー交響楽団首席客演指揮者、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団Composer-in-Association。25年4月、日本センチュリー交響楽団音楽監督に就任予定。



©Ryuya Amao

角野隼斗 [ピアノ] Hayato Sumino, Piano

2018年、東京大学大学院在学中にピティナ特級グランプリ受賞。2021年、ショパン国際ピアノコンクールセミファイナリスト。これまでにシカゴ響、ウィーン放送響、ポーランド国立放送響、ボストン・ポップス、N響、読響など、国内外のオーケストラと多数共演。2024年、日本武道館で単独公演を開催、同会場におけるピアニストの史上最多動員13,000人を記録。さらに、昨年はロイヤル・アルバート・ホール(ロンドン)、ラヴィニア音楽祭(アメリカ)、グシュタード・メニューイン音楽祭(スイス)、ラインガウ音楽祭(ドイツ)へのデビューを果たしたほか、パリ、シンガポール、ソウル、そして、2025年1月には自身最大の7都市を巡るEUツアーを開催。ベルリン・フィルハーモニーをはじめ、世界でのリサイタルを成功させるなど、国際的な知名度を急速に高めている。2025年11月には、カーネギーホール大ホールでのソロリサイタルデビューも予定されている。“Cateen (かていん)”名義で活動するYouTubeチャンネルは登録者数140万人超、再生回数は2億回を突破。2024年、Sony Classicalと契約を締結し、『Human Universe』をリリース。現在、ニューヨーク在住。CASIO電子楽器アンバサダー、スタインウェイアーティスト。



©Yutaka Hamano

原田 節 [オンド・マルトノ] Takashi Harada, Ondes Martenot

3歳よりヴァイオリン、7歳よりピアノを始める。強烈な自己表現能力に優れたオンド・マルトノとの出会いを期に、慶應義塾大学経済学部を卒業後渡仏、パリ国立高等音楽院(コンセルヴァトワール)オンド・マルトノ科を首席で卒業、オンド・マルトノを独奏楽器として扱う世界でも数少ないソリストとしての演奏活動を開始した。ピアノを遠山慶子、オンド・マルトノをジャンヌ・ロリオ女史に師事。作曲家としても、オーケストラ作品から独奏曲、また数々の映画やアニメに至るまで幅広い分野でその才能を披露している。出光音楽賞、横浜文化奨励賞、ミュージック・ベンクラブ賞など受賞も多数。また、20世紀を代表するフランスの作曲家オリヴィエ・メシアン作曲「トゥーランガリラ交響曲」は、オンド・マルトノが主役として活躍する楽曲であり、日本国内はもちろん、ソリストとしてカーネギーホール、ベルリン・フィルハーモニーホール、シャンゼリゼ劇場、パリ・オペラ座、ミラノ・スカラ座といった主要な劇場における世界最高峰のオーケストラとの共演は20ヶ国350回を超える。

Instagram: @takashiharadaondesmartenot

1945年2月2日、オリヴィエ・メシアン(1908~92)は22日に行われるリュシアン・ファーブルの戯曲「トリスタンとイゾー」上演のための劇音楽を録音した。舞台の進行に合わせて流されるこの音楽は、事前に作成された綿密なスケッチをもとにメシアン自身がオルガンで即興したもので、そのスケッチは後に公開されている。それを見ると、後の歌曲集「ハラウィ」のための素材にそこから採られたものがあることが分かる。「ハラウィ」は「トゥーランガリラ交響曲」、合唱曲「五つのルシャン」と並んで、メシアンの作品中「トリスタン三部作」と呼ばれるものの第1作である。

リヒャルト・ワーグナー(1813~83)の楽劇「トリスタンとイゾルデ」や、中世文学の研究者ジョゼフ・ペディエ(1864~1938)が中世から残された文学作品をもとに編んだ物語「トリスタンとイゾー」(岩波文庫に邦訳あり)によって多くの読者を得た、コーンウォールの騎士トリスタンとアイルランドの王女イゾー(イゾルデ)の物語は、その後諸芸術の世界にさまざまな派生作品を生んだ。メシアンの三部作もそのうちのひとつである。ただし、メシアンは物語の進行や登場人物をめぐる状況に特別な関心があった訳ではない。彼の心に強く響いたのは、ワーグナーの楽劇やペディエの物語の最後にあられる「愛の死」である。恋人たちが死によって肉体の愛と精神の愛を止揚し、永遠のものにする。この「愛の死」のイメージを純粹に採りだしたのが、メシアンの「トリスタン三部作」なのだろう。

三部作中最大規模を誇る「トゥーランガリラ交響曲」は、20世紀の古典として現在では多くの演奏・録音機会を得ている。しかし、この作品をメシアンの音楽の代表作と呼ぶのにはためらいがある。確かに、後にメシアンの妻となるピアニスト、イヴォンヌ・ロリオを想定したピアノ独奏のパートがあり、またメシアンの偏愛した電子楽器オンド・マルトノ(電気技師モーリス・マルトノが発明した電子楽器で、鍵盤をもちながらヴィブラートやグリッサンドができる点に特色がある)が用いられており、また第6楽章ではメシアンが多くの作品を捧げることになる鳥の歌が聴かれるなど、彼の音楽を代表する語法がいくつもみられる。しかし熱心なクリスチャンであったメシアンの作品は、その多くが彼の信仰から生まれたものであって、宗教性の稀薄な作品は数少ない。大規模な管弦楽曲ではこの「トゥーランガリラ交響曲」の他に1、2曲あるかどうかというくらいである。その意味では、メシアンの創作活動の全貌をうかがうには不足のある曲と言うべきかもしれない。

その一方で、キリスト教的な色合いが、彼の作品を多くの聴き手から遠ざけていることも確かである。キリスト教思想としてもやや独自に過ぎる点の

ある自身の宗教観を脇に置き、愛の高揚と官能をストレートに歌い上げたからこそ、「トゥーランガリラ交響曲」は多くの聴衆の心に響く名品となったと言えるだろう。

■メシアン：トゥーランガリラ交響曲

クセヴィツキーから
依頼を受けて

ロシアに生まれてアメリカ合衆国で活躍した指揮者セルゲイ・クセヴィツキー(1874~1951)は、四半世紀近くの間ポストン交響楽団の常任指揮者を務めて名声を得た。彼は同時代音楽の発展と普及に貢献するクセヴィツキー財団を設立し、さまざまな作曲家に新作の委嘱をしている。そうした依頼を受けた作曲家の中に、オリヴィエ・メシアンがいた。1945年に彼に向けて出された依頼は、作品の長さや編成規模などについていっさいの注文のないものであった。メシアンは翌年からこの委嘱作品の作曲に着手することになる。

トゥーランガリラとは?

この委嘱作は、当初4楽章からなる伝統的な交響曲として構想された。しかしこの構成は、複雑なリズム構成と音色の組み合わせをみせる三つの「トゥーランガリラ」楽章を挿入したことで、大きく変更された。さらに緩やかなテンポの「トゥーランガリラ」楽章と速い楽章との間のバランスをとるためにいくつかの楽章を追加して、最終的には10楽章としての体裁が定まった。タイトルにある「トゥーランガリラ」はサンスクリット語に基づいたメシアンの造語で、彼によれば「トゥーランガ」は「馬のように駆け、砂時計の砂のように流れていく時間」を意味し、「リラ」は「宇宙における神聖なはたらき、創造と破壊のゲーム、愛による精神的かつ肉体的な結びつき」を意味する。メシアンはパリ音楽院の学生であった頃に、音楽学者であり作曲家でもあったモーリス・エマニュエル(1862~1938)から民俗音楽研究の手ほどきを受けており、特にインド音楽への関心を彼から引き継いだ。このエキゾチックなタイトルは、複雑なリズムとその組み合わせ、構成の発想がインド音楽を研究した成果と結びついていることを示すものである。

初演の経緯

1948年2月15日、全10楽章のうち第3、4、5楽章のみが、「三つのターラ」と題してアンドレ・クリュイタンズ指揮パリ音楽院管弦楽団によってパリで初演された。これはピアノ独奏と電子楽器オンド・マルトノと大量の打楽器を含む大編成の管弦楽がどのような音響を生むのかを確認するための試演として企画されたようだ。この後同年11月に楽譜は完成し、世界初演は1949年12月2日、レナード・バーンスタイン指揮ボス

トン交響楽団とイヴォンヌ・ロリオのピアノ独奏、ジネット・マルトノのオンド・マルトノによって行われた。

第1楽章 序奏。激しい導入に続いて、低音の金管楽器群によって「彫像の主題」が提示される。その後クラリネットに「花の主題」があらわれ、音量・音色・表情などにおいて鮮やかな対比を成す。

第2楽章 愛の歌1。情熱的な愛がトランペットを中心とする輝かしい響きで、愛の優しさが弦楽器とオンド・マルトノによって示される。

第3楽章 トゥーランガリラ1。三つの主題がそれぞれ明快な色彩の対比を成しつつ交替する。複雑なリズムの扱いは「五つのルシャン」第5曲を予告するとも言える。

第4楽章 愛の歌2。ピッコロとファゴットの組み合わせが特徴的なスケルツォ風のエピソードに始まり、先行楽章を振り返りつつさまざまなエピソードがあらわれては消えていく。

第5楽章 星たちの血の喜び。「彫像の主題」から派生した旋律に始まり、色彩の氾濫と共に熱狂的な高揚をみせる。ピアノのカデンツァの後、「彫像の主題」があらわれて交響曲前半を締めくくる。

第6楽章 愛の眠りの園。今まで断片的に予告されていた「愛の主題」がここで初めて全体像をあらわす。ピアノ独奏は、眠る恋人たちのまわりで鳴き交わす鳥の歌を奏でる。

第7楽章 トゥーランガリラ2。一貫して無調による。打楽器が活躍し、メシアン音楽に特徴的なリズムが重層的に重ね合わされている。

第8楽章 愛の展開。タイトルには「愛の主題」を中心とした展開部という意味も込められていることだろう。大きく拡大され、変容を受けた「愛の主題」が陶酔的なクライマックスを築き上げる。

第9楽章 トゥーランガリラ3。インドネシアのガムラン音楽を思わせる音響の中で、楽章冒頭の主題による一種の変奏曲が繰り上げられる。

第10楽章 フィナーレ。一種のソナタ形式で、第6楽章の素材を中心に、全曲のさまざまな動機や主題が回想される。やがて「愛の主題」が高らかに歌い上げられると、熱狂とともに音楽は加速し、輝かしい和音にたどり着いて全曲が閉じられる。

[楽器編成]ピアノ独奏、オンド・マルトノ独奏、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、コルネット、ピッコロトランペット、トロンボーン3、チューバ、ヴィブラフォン、チューブラーベル、大太鼓、小太鼓、テンブルブロック、マラカス、トライアングル、タンバリン、ウッドブロック、シンバル、吊しシンバル、チャイニーズシンバル、タムタム、プロヴァンス太鼓、チェレスタ、ジュータンブル、弦楽5部。



発想が生まれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいて刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／丸の内／Olive LOUNGE 渋谷／渋谷サクラステージほか、全国に順次拡大中。最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE
公式アプリ

App
Store



Google
Play

